

書名：消えた「最後の授業」

著者：府川源一郎

出版社：大修館書店

出版年月：1992年7月

総ページ数：300ページ

ISBN：4469220868



推薦者

伊東治己

鳴門教育大学大学院教授
言語系コース（英語）

皆さんは「最後の授業」という短編小説を読んだことがありますか。フランスの小説家アルフォンス・ドーデ（1840～1897）による短編小説集『月曜物語』（1873年）に収録されています。作品の舞台はフランスとドイツの国境付近に広がるアルザス地方。現在はフランス領ですが、ドイツとフランスの間でしばしば領有権が代わった地域です。時は1872年、普仏戦争（プロシアとフランスの戦争）にフランスが破れ、アルザス地方がプロシアに割譲された時の話です。「最後の授業」とは、フランス語教師であるアメル先生による最後の授業で、その授業を受けていたフランス少年の回想録となっています。アメル先生は、生徒たちと教室に集まった大人たちに向かって、フランスがプロシアとの戦争に敗北したため、この地はプロシア領となり、もはやフランス語は教えられなくなったことを告げ、授業の最後に「フランス万歳！」と板書し、最後の授業を終えるという話です。

この短編小説は日本にも早くから紹介され（1902年が最初）、かつ、国語愛護の精神を涵養するために第二次大戦前から我が国の国語教科書に採用されてきました。戦後の一時期、教科書から消えますが、1952年に再登場し、小・中の国語教科書に採用されてきましたが、1986年以降、忽然とすべての国語教科書から姿を消すこととなります。なぜでしょう。その答えを『消えた「最後の授業」』は詳細に説明してくれています。「最後の授業」が教科書から消えるきっかけを作ったのが、社会言語学者田中克彦による『ことばと国家』（岩波新書、1981）に含まれている「最後の授業」の舞台裏を語った論説です。それまでは、「ドーデの短編は、母国語を奪われそうになる人々の悲しみと、死んでもそれを奪われまいと決意する、自分たちの言語への愛着を見事に描き出している」（鈴木孝夫（1975）『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮社、p.195）という解釈が一般的でしたが、田中克彦はこの「最後の授業」に内在する様々な矛盾点（例えばフランス君の母語はフランス語ではなく、ドイツ方言とも言えるアルザス語であること）を指摘し、この作品を「言語的支配の独善をさらけ出した、文学などとは関係のない、植民者の政治的煽情の一篇でしかない」（p.127）と言い切っているのです。その点を受けて、著者は田中克彦が「最後の授業」の教科書教材としての生命にとどめをさしたと結論づけていますが、同時に田中克彦の批判的解釈の妥当性を検証する必要性も指摘しています。しかし、この本の中で特に皆さんに注目していただきたいのは「教材を読むということは、唯一の正解を教室の中で探し出す作業ではないし、あらかじめ設定された物差しを使って作品を切り刻む没主体的な行為でもない。読むことは、自らの問題意識をもとに、作品を解体し、切り開いていく営みであり、その行為自体が常に外側の世界とつながっていなければならないのである」（p.285）という著者のことばです。日々教室で教材を扱う教師にとっていつも心にとめておきたい名言だと思います。